



15

現象学としての書道 —はみだすラボで観察された自己組織化の萌芽—

生涯発達研究所TANE 櫻井育子(朱紅icco)

はじめに

最近、「どうやったら人は動き始めるのだろうか」という問いについて考えている。教育や福祉の現場では自己決定の重要性が語られる。自分で選ぶこと、自分で決めること、自分の意思を表明すること。それらは確かに大切である。しかし現実の人間は、いつも明確な意思を持っているわけではない。むしろ、「何か違う気がする」「でも何が違うのかわからない」「だから動けない」という状態の方が自然ではないだろうか。私は最近の実践を通して、人が動き出せない理由は決断力の不足ではなく、自分の違和感を安心して持ち続けられないことにあるのではないかと考えるようになった。

違和感は一人では持ち続けられない

1年半前に始めたフリーランス教育者のためのオンライン探究コミュニティ「はみだすラボ」の対話会では、「違和感」という言葉が頻繁に登場する。教育への違和感。働き方への違和感。組織への違和感。家族との関係への違和感。社会の常識への違和感。興味深いのは、それらの違和感に対して必ずしも答えが出るわけではないことである。

「私もそう感じています。」「それは面白い視点ですね。」「まだ言葉にならないですね。」そんな対話で終わることも少なくない。しかし、そこで起きていることは決して無意味ではない。一人で抱えていると、「自分がおかしいのではないか」と思ってしまう違和感が、誰かとの対話によって保持できるようになるのである。傷の舐め合いでもなく、単なる共感でもなく、「この違和感は持っていていいのだ」と、そう気づいたとき、人は違和感を感じる自分自身そのものを否定しなくなる。

現代社会は答えを急ぎすぎる

現代社会では、「違和感」は解消されるべきものとして処理される。違和感が生まれると、すぐに原因分析が始まる。診断される。改善策が提示される。解決が求められる。教育もそうである。福祉もそうである。SNSもそうである。ビジネスも答えのあるものが伸びていく。しかし、人間の発達や成長はそれほど単純ではない。すぐに答えが見つかる違和感もあれば、何年も持ち

続けることで初めて意味が見えてくる違和感もある。むしろ、重要な違和感ほど簡単には言葉にならない。だからこそ、その曖昧な状態のまま存在できる時間が必要なのではないだろうか。

自信を持って悩み続ける

はみだすラボで対話を続けていると、不思議な変化が起きる。人は必ずしも答えを見つけるわけではない。しかし、自信を持って悩めるようになる。自信を持って迷えるようになる。自信を持って、自分で居続けようとする。「この違和感を持つ私は間違っているのではないか」という不安が薄れ、「もう少しこの感覚を大切にしてみよう」と思えるようになる。時には、自分の頑固さを手放さなくていいのだと気づく人もいる。頑固さは一般的には変えるべきものとして扱われる。しかし、その頑固さの奥には、その人が長年守り続けてきた感覚や価値観が眠っていることもある。それを急いで修正する必要はない。まずは、その感覚が存在していることを認めること。そこからしか始まらない変化がある。

「すみあそび」でも同様である。参加者は真っ白な紙を前に立ち止まる。何を書けばよいかわからない。正解を探す。他者の作品が気になる。思うように線が引けない。ところが、すぐに答えを出そうとせず、その戸惑いと共に筆を持ち続けていると、少しずつ何かが動き始める。書き続けているうちに、その人だけの表現が立ち上がってくる。私は近年、すみあそびを単なる表現活動ではなく、「違和感を保持する実践」として捉えるようになった。書くことそのものが目的なのではない。書くことを通して、自分でもまだ言葉にならない感覚と共にいること。そして、その状態を誰かと共有できること。そこに、すみあそびの本質があるように感じている。

人は違和感から育つ

私は現在、このプロセスをひとつの循環として整理しようとしている。まだ仮説段階ではあるが、その中心には「違和感を保持する関係」の存在があるように感じている。現代社会には、違和感を共有する場所はある。しかし、違和感を保持する場所はどれほどあるだろうか。はみだすラボで起きていることも、すみあそびで起きていることも、問題解決や自己実現を目的としたものではない。

違和感を急いで解消せず、そのまま場に置いてみる。迷いながらも、自分自身で居続けてみる。その過程のなかで、人は少しずつ世界との関係を編み直していく。私はその姿のなかに、自己組織化の萌芽を見ている。違和感を保持することと、人が動き出すことのあいだには、まだ十分に言語化されていない関係があるように思われる。現在、私が整理を試みているREAL Cycleも、その現象を説明するための仮説のひとつである。

人は答えによって育つのではない。違和感を持ち続ける勇気と、それを支える関係のなかで育っていくのではないだろうか。今年度のArt Play Worker養成講座（第2期以降）では、実践と対話を通して、この循環モデルの検証にも取り組んでいく。違和感から始まる発達と自己組織化のプロセスについて、関心のある方と共に探究を続けていきたい。

朱紅icco（櫻井育子） | 生涯発達研究所TANE代表・はみだすラボ主宰

宮城県在住、1979年生まれ。水瓶座。対話的書家・教育デザイナー。書と対話を通して、人と関係性の生成について探究している。Art Play Worker養成講座、第2期がスタート。研究参画者も募集中です。